

ラオインの宗教人類学

飯嶋, 秀治
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2320979>

出版情報 : 九州人類学会報. 28, pp.1-19, 2001-07-07. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

ラオインの宗教人類学

飯 嶋 秀 治 (九州大学大学院)

I. 問題

人間は環境といかなる関係を結び得るのか。その一つの窓口として、植物を取り扱う人類学といえば、主には宗教人類学、医療人類学、認識人類学、生態人類学などが挙げられよう。こうした諸研究を、ここで仮に〈植物の人類学〉と呼ぶことにするが、しかしその内部には、何をどのように研究するかという点で、大きな差異が含まれている。

端的に言えば、宗教人類学や医療人類学は、1人の呪医に集約する植物知識を儀礼体系なり医療体系なりの一項目として、植物に関心を払いがちであるのに対して、認識人類学と生態人類学は、あるコミュニティ全体に共有される植物知識や関係のあり方を、研究の焦点として知ろうとしてきた、と言えよう。このため、植物を網羅的に研究するための方法的な厳密さが認識人類学と生態人類学には備わっており、こうした厳密で網羅的な方法を携えた研究が、〈植物の人類学〉にもたらした知識の豊かさは疑うべくもない。

認識人類学は、主にはミクロな民俗語彙を窓口、彼ら民俗の認識と我ら近代科学の認識との異同を論じ、そこから彼ら独自の植物認識の在り方を照らし出してきた (合田編 1982、松井 1983、1989、寺島 1995)。具体的に言えば、そこでは、①まず植物を採集・種名を同定・標本を作製し、②その標本を基にフィールドでそれらの方名を同定、③その部位の名前や使用法をインタビューで悉皆調査し、④調査後、自然科学的な分類体系を基に民俗植物学的な分類体系を比較検討、そこから彼らの認識世界の独自性を明らかにしようとする (松井 1991)。

いっぽう、生態人類学では、主にマクロな植生の在り方を窓口、彼らの環境資源とその利用を理解し、そこから彼らの環境への存在の仕方を評価してきた (山田 1977、Orlove 1980、重田 1991、1994、1995、Little 1999)。具体的な方法では、①や②は上述の方法がやや厳密さを欠いたものになると考えて大過ないが、③ではむしろそうした植物の利用を観察から悉皆調査し、④調査後、そうした資料を労働時間、利用種数、エネルギー・カロリー・蛋白質などの定量分析にかけ、その他の量的資料と比較検討、そこから彼らの行動世界の独自性を明らかにしようとしてきた (大塚・市川・秋道編 1995)。

一口に言えば、認識人類学と生態人類学との植物の論じ方は、ミクロな／内面の／知識を扱う民俗範疇論とマクロな／外面の／行動を扱う資源利用論、とある意味で相補的

に研究が進められてきたのである。だが近年、その内部から次のような指摘がなされてきたことは重要である。すなわち、松井は、認識人類学の提示する民俗分類体系が、民俗分類の実態と大きくかけ離れており(松井 1983: 79-80)、それゆえに日常生活における知識の応用研究の必要を提起していたのである(松井 1989: 第II章)。そこで、生態人類学から、近年その関心の多様化と共に、こうしたギャップに対応する研究もでてきた。例えば重田は、エンセーテという方名を持つ一種の栽培植物が変異を示した際、まずその変異体が「品種」としてその方名の下位範疇に「認知選択¹」され、またその品種がある用途へと「実用選択」されることで、多様な品種創出がなされていること、などである(重田 1995)。

だが、残念ながら前者の問いは具体的に展開させられてきておらず、後者の問いでも「認識」と「行動」との間であって、それを繋ぐはずの位相が抜け落ちてきたままである。だとすれば、そこには、この領域を詳細に見つめることで、先行研究の空白を補い、全体として〈植物の人類学〉を豊かにする研究が必要とされよう。そのために、人間が植物とどう関わり得るのか、この在り方を上述の網羅的植物調査方法とは別の仕方を知ることで、別の仕方でも伝えること。〈植物の人類学〉に宗教人類学が開き得る、問いの1つの可能性はここにあるのであり、これが本論文の目的となる。そこで次章では、第一に、認識人類学的な「知識」への関心と生態人類学的な「行動」への関心の間にある位相、すなわち、個々の植物に関わる際に、そこに直接関与する〈身体²の感覚〉を見てゆこう。しかしそれはコミュニティ・メンバー全員に共有されるのっぺりとしたものではない。そこで第二に、日常生活の違いから来る交々の〈社交性³〉がいかに織り込まれているのか、を見てゆこう。筆者の考えでは、こうした中で個々の植物への〈体験様式⁴〉が現れてくるだろうからである。

1 筆者は、cognitive は「認知」、そこに言語的な知識が再帰する時「認識」、と訳されるべきであると解している。この意味で、重田の指摘する「多様な品種」は、方名を持っていて識別されているので、「認識選択」とした方が良いのではないかと考える。この区分は重要であり、「認知」が「認識」の位相とずれることは、暗黙知の哲学から原理的に、生態心理学からは状況的に解明されつつある。

2 この関心に最も近い先行研究として、重田(1991、1995)を挙げておく。そこには、エンセーテの儀礼的保護がその品種の遺伝資源の保存となるという「無意識的行為」を含めて捉えるように提案されている。だが、筆者が同じ位相を取り扱いながら、〈無意識〉という術語を採用しなかったのは、筆者からすれば問題は、本稿で取り扱うような身体(的慣習行為)をそのまま有意義な現象として取り上げられない我々の言説的空白状態にあるのであって、そこに手垢のついた〈無意識〉概念(小浜 1998)を導入すると、事態の前提を変えずに、結果としてこの状態を先延ばしにしてしまうように思われたからである。

3 この関心に最も近い先行研究として、松井(1989: 第II章)を挙げておく。そこには、方名の性差と世代差による社会的分散度が研究にされ、野甫島のような小島でさえ、その知識が均分されている訳ではないことを示している。だが、筆者のフィールドにはその社会的背景に独特なものがある。〈社交性〉とは奇妙な用語と思われたかもしれないが、この用語は society の訳語に「社会」と「交際」を当てた福沢諭吉の発想を借りて(柳父 1982: 1-25)、筆者の含意を込めたものである。詳しくは本章第2節(2)で触れるが、彼らの「コミュニティ」が我々のイメージする閉域的な〈社会〉というより、開かれて交叉・交通・交流をくり返す〈社交〉という文字に馴染みやすいことを納得していただけるのではないかとと思う。

II. ラオインとの関わり方

筆者がフィールドとしたワルムン・コミュニティは、西オーストラリア・キンバリー地域にある先住民コミュニティである。大地は開けた低地森林地帯であり、ユーカリブトウス科の木が優先種となっている (Commonwealth of Australia 1990 : 7)。季節は大きく雨季 (11月—3月) と乾季 (4月—10月) とに分かれ、一年間の平均雨量は469 mm、同じく平均気温は最高で33.8度・最低で19.9度、平均湿度が37%となっている⁵。

このコミュニティは、彼らが自らのコミュニティを持とうとした1970年初頭から徐々に人口が集まり、現在、1979年に設立されたカソリック系学校1、その前後に持たれたコミュニティ・クリニック1 (Stewart 1999 : xii)、スーパーマーケット1、をコミュニティ内に持つ⁶。人口は最大時には620人という統計があるが、乾季は人口が減るため、統計の時期に依り419人という統計にもなる⁷。人々は通常クレオールのキチャ (Kija) 語を話し、8つの親族組織に分かれている。多くの男性成年は、コミュニティ付近に散在する複数の牧場で季節労働をしたり、コミュニティ労働に携わっており、それ以外の主な現金収入源として年金がある (cf. 窪田 1994 : 161)。こうした収入で衣食を満たしているため、ブッシュ・タッカーと呼ばれる伝統的な自生食物は彼らの主食になっているとは言いがたい (Smith & Smith 1999)。

筆者はこのコミュニティに2000年12月初旬に予備調査として1週間ほど滞在し、同月末から2001年2月までの約2ヶ月の間住み込み、英語でインタビューを行った⁸。季節はちょうど夏の雨季にあるので、コミュニティには最も人口が集中し、筆者は全72戸⁹のうち56戸を周り、446人まで同定することができたが、この時期が最も交通の低減する期間であったことに注意されたい (このことの意味については本章第2節(2)で触れる)。そこで今回こうしたフィールドで、筆者は当初、上述したような網羅的な植物調査を行おうとしていたのだが、結果的にはかなり特異な方法で、植物と人間との関わりをテーマに

4 元来は臨床心理学からきた術語で、「客体を体験するときの当人の活動様式ないし仕方」とされる。例えば動作法では、意識と身体との関係を主動感 (自らが身体を動かしている感じ) / 自動感 (勝手に身体が動いている感じ) / 被動感 (身体が何物かに動かされている感じ) などと分けている (成瀬 1988 : 26-28)。筆者はここで意識と身体との関係を、人間と環境との関係に読み替えて用いる。

5 厳密に言えば、この雨量・平均気温資料共に、ワルムンから160km南南西に下ったホールズ・クリークの資料である。雨量は1890年、気温と湿度は1944年からの平均資料である (Beard 1979 : 24)。

6 1 km北に行けば英系移民の経営するロードハウス、学校教員用住居、1年前に閉鎖された文化センターがある。

7 前者は1997年の Environmental Health Network Survey からのもので調査時期は不明。後者は雨季明け直前の1998年3月の統計。

8 本調査は、2000年度福岡アジア太平洋研究センターの若手研究者助成を受けて2000年9月から2001年3月まで行われた調査の一部である。

9 うち、7戸は廃屋なので65戸の家や建物が住まいとして使用されており、そのうち14戸は学校や医療、コミュニティストアや事務・建築に携わる移民たちだけのものであった。

調査することになった。それゆえ、以下の資料提示と考察においては、どうしてそのような方法をとらざるを得なかったのかを明らかにするようにしながら、「知識」と「行動」の間を埋めて補う諸テーマとして、〈身体の感覚〉〈社交性〉〈体験様式〉という3テーマを指摘してゆきたい。まずは彼らの狩猟採集の挿話的¹⁰な記述から始めよう。

II-1. 〈身体の感覚〉

(1) その時そこで植物を採る人／狩猟採集に埋め込まれた習得

挿話1：1月21日昼前、コミュニティから40kmほど離れたボウ・リバーに釣りに出かけた時の話。クリスマスから2月にかけて学校も休みに入るこの時期、3日に1度の割合で、天気さえ許せば彼らは釣りに出かけた。車には老婆から学校を出たての6人の女性達と2人の乳児が同乗し、全て親戚縁者であった。11時過ぎにポイントに着き、少しずつ場所を変えながら午後2時過ぎまでに5匹のプレムと3匹のキャット・フィッシュを釣り上げていた。釣った魚は太目の木の枝で頭を叩いて気絶させ(①)、針を外すと砂の河岸に放置される。アイリーンがプレムを釣りあげると、従姉妹のヴェネッサが、愛娘の乳児チャームに「行って来て、引っ叩いてごらん」と言うと、1歳に満たない彼女らはよちよちと駆けつけ拾った木の棒で魚体をランダムに打ち付ける(②)。だがしばらくすると、既に陸に打ち上げられた魚達にはたくさんの蟻がたかってくる。そのためもう一人の乳児フォリナは蟻を追い払おうとしたのだろう。彼女は魚の周りの蟻を木の枝で何度となく打っていた(③)のだが、逆に彼女の方が蟻に噛まれ、奇声をあげて泣き出してしまふ。するとヴェネッサが跳んで来て、彼女を川に入れる。しばらくして泣き止んだフォリナが川から上げられると、彼女は小枝で水面に浮かぶ蟻達を打ち付けはじめる(④)。

大人たちが魚を叩く場所とやり方(①)を、乳児達のそれ(②)とを比較して欲しい。恐さと痛さと悔しさの中で学習された蟻について(③④)も同様だが、こうした対処の技法は、親族縁者に媒介されて、徐々に徐々に反復されて洗練されてゆくのであり、こうして学校に通うようになる頃には、一通りの動植物については知っているようになる。

挿話2：1月1日昼過ぎ、コミュニティから1km程離れた岩場の小川に、ミンジャラというブラック・ベリーを採りにいった時の話。アイリーンのところで、しばらく他愛のない話をしていたところ、彼女がこの季節には向こうのブッシュでミンジャラが採れる(①)、のだと言う。と、すぐに私と数人の少年少女達とがミンジャラ採集に出かけるこ

10 挿話の()内の数字は傍証として引用する箇所。名前の後の()内には性別と年齢を記す。

とになった。最初にジュニア (♂11) にロゼル (♀12)、エイデン (♂10) が銘々にボトルとバケツやバッグを持つ。またブッシュへの途中、ガヴィン (♂9) も加わる。皆姉弟や親戚縁者である。ブッシュに向かう途中で、筆者がある香草を拾い上げると、すぐにロゼルが「それは薬草なのよ」と言う。けれどもジュニアは異論を差し挟み「違うよ、そりゃ別の奴だよ!」「違うもん。そんなことないもん。これだって薬草だもん」(②)と、すぐに彼女は別のモス・グリーンの草を取り上げて「これも薬草よ。」今度は彼も同意する(③)。そして彼らが言い争う間、エイデンとガヴィンは黙って聞いている(④)。ミンジャラの木がある場所は、既に知られていた(⑤)ようだ。最初に着いたのは、小さな丘だった。けれども7-8分かそこらが過ぎるとすぐに彼らはまた別の場所に誘う。「あっちに」干上がった小川があったのだ。そしてここからはミンジャラ採集のために川を溯る。数分歩いて次の場所にたどり着くと、既に集めたその実を食べながら、銘々に集めだす。次の場所ではその実を集めつつ、私がその植物を覚えるのに、葉っぱをじっと観察していると、ジュニアが「それは毒だよ」と言う(⑥)。場所を移りながらロゼルが10m程向こうの樹を指しながら「あ、同じ葉っぱが向こうにもあるわよ!」と言う(⑦)。観察していたところでは、場所を移る主導権がある訳でもなく、蜥蜴や魚を見つけると、それらに向けてすぐに石を強く投げつける(⑧)。ある場所で、僕が川のなかに大きな実を見つけた時、彼は「そいつは美味くないよ、こいつを食べてごらん」と言ってきた。確かにそれは美味くなかった(⑨)。また、ミンジャラが枝についているのを見つけた際、それについて彼らに問うと、彼らは「良くないよ。赤や黒の色のものでもね」と言う(⑩)。その内に慣れてくるとミンジャラの実を拾う時、もし落ち葉の下のものを求めると、殆ど全ての実は既に腐っており、逆に日差しの下では、殆ど全ての実が既に干からびていることが分かってくる。それゆえ、甘い果肉がたっぷりついた上物を見つける最良の方法とは、地面や落ち葉、岩の表層を見ることなのである。そして、黒々として新鮮で丸々としたものを見つけた時は、確かにそれが上物なのだが、たとえ外見からそれが判断できない時でも、それが上物かどうかは「触れた」瞬間にすぐ判断がつく(⑪)のである。小さな滝壺にたどり着くと、皆何度となくその滝壺にダイヴする。ここに来るまで5-6箇所に止まっただろう。帰りには一度も止まることはなかった。ロゼルとエイデンはバッグに2kg余りの実を持っている。ジュニアは300g程度。14:00小川を去る。彼女はこの帰りにも2種類の薬草を同定できた。ジュニアも彼女も「煮てね、それを傷にこすりつけるんだ」と言う。風邪やお腹の病気用には、「煮てね、飲むの」。但し「何と言う名前なの?」と訊くと、「忘れたなあ」(⑫)。

ここでは、②~④⑥⑨~⑩⑫のような場面から推測するに、知識の分散は均等ではないのだが、11~12歳の子供にもなればこうした知識を一通り持っていることが分かる。また、⑤のような場面から、おそらく彼らがこの小川のラフな地理を覚えているのだら

うが、そうした知識に依拠しつつも、⑦のように彼らが別の場所に移る時には、サインとしての樹の葉を探しているのが分かる。

しかし、重要なこととは、①⑦⑫のような場面から推測するに、こうした植物同定の知識がいつでもどこでも引き出せると言うよりは、その時(①)その場所で(⑦)、植物の名前以上に(⑫)、その存在の認知と殆ど同時に、その働きかけ方が想起される傾向があることである(⑧)。しかも当の植物の「認知」においては、個々の枝葉の形態以前に樹の植生と言える総合的な諸パターン(幹のパターン：高低・細太・色彩・樹皮、枝のパターン：垂直的／水平的・風への揺らぎ方、葉のパターン：形態・色彩・表裏の色彩対照、花、果実、堅果と身体との関係など)が重要な手掛かりになっている(⑦)。

挿話3：1月6日、50種の植物を小分けにしてコミュニティを訊いて周った時の話。家のテラスで、ラジオ音楽を聴きながらメアリー(♀52)、?(♀中年)、アイリーン(♀47)とマーガレット(♀26)の4人がトランプをやっていた。挿話1に半分重なる親族縁者達である。筆者は彼女らに持参した植物を判定してもらおう。ところが袋の中には(見せる予定ではなかった)数日前に集めたものもあったため、時々彼女らはパッと見て同定するのを躊躇したが、そうした場合には、「どこでこれを採ってきたの?」と訊き返され¹¹、また殆どの場合において、まずマーガレットが一掴みの植物を手にとって(①)嗅いで嗅いで嗅ぎまくり(②)、その後それをアイリーンやメアリーに渡す。すると、彼女等もそれに触れながら(③)、その匂いを嗅ぎわけ(④)、その植物の名前についてお互いに議論する。こうして、これはさすがに無理だろう、と想っていたのものまで、有用なものとして使われることが分かる。

こうした行為を何度も観察していると、彼らの植物同定には、全体的な外見のみならず、触覚(①③)や嗅覚(②④)といった身体感覚の全てが、時間的秩序の中で多元的に動員され、彼らが当該の植物を、〈見〉分けているのに前後して、いわば〈身〉分けてもいることが認められよう(市川 1993:188-191)。

以上挿話1～3を考慮すれば、そこから内省されるのは、これまでの認識人類学・生態人類学の植物同定に至るまでの〈身体感覚〉への関心の薄さであろう。植物の枝葉による同定や方名(知識)の正確な想起は、植物の「知識」とその結果としての「行動」の重要な補助手段になっていても、認識人類学と生態人類学が共有してきた脱文脈的な調査方法が、人類学者側の有便性に沿ってはいても、彼らの側の「知識」や「行動」を

11 すぐに植物同定ができないときに「どこから採ってきたんだ」と場所を訊いてくるのは、彼らが同定に際して植生場所を検索項目として重んじていることの傍証となろう。

知る上で、適切な方法からはずれていたのではないだろうか。それらは、いつでも・どこでも知識が引き出せると想定し、また方名という認知過程の一部を全体化してしまい、認知過程の全体性を捨象しがちであったように見受けられた。そこで、筆者はこうした点を考慮に入れ、定量的な調査を一時保留し、「今現在、この季節にこのコミュニティで使用されている植物」に調査を絞ることにしたのである。そんなある日のことであった。

(2) 質問：名前・用法・効果・エピソード

挿話4：1月8日11:30、コミュニティ入り口部でたまたまベティー（♀56）と彼女の孫ローズマリー（♀若者）に出遭う。彼女らはある種の植物を集めており、その片腕で胴脇にやっそこ抱え、彼女らのトラックに載せていた。訊けばそれは「薬草（プシュ・メディスン）」だという。その後、彼女はすぐに幾つかの薬草の名前を挙げてくれたのだが、惜しい事に病の症状に関する英単語が筆者には理解できなかった。しかしこの植物を薬草としてコミュニティの一部の人間が今現在、ここで使用されていることは間違いない。

そこで筆者は、まずこの植物・キチャ語で方名をラオイン（クマツヅラ科 Verbenaceae¹²）というこの1種類の薬草について調べてみることにした。ラオインはコミュニティ入り口部にあり、平坦な草原地帯でまとまって育ち、多年生で、その高さは70cmどまり。そのため雨季はその他の草に隠れがち、黒くて攻撃性の低い多くの蟻が葉の裏側や茎に群がっている。植物の先端部は赤紫色をしていて柔らかいのだが、その他の葉はより深緑色をしていて比較的硬い。葉は複葉の対生、切断面を嗅ぐと、強い匂いがして菖蒲に似ている。その茎はかなりの繊維質で堅く、樹皮を剥くと緑白色の軸が現れる。

調査方法は簡単で、このラオインを毎朝採集し、①一定期間にそのコミュニティに入りしていた446名のうち、なるべく多くのメンバーに、②自然な状態のままで、言い換えれば、彼らが親族縁者といれば特に一人一人をバラバラにすることなく、③「この植物は何か?」「この植物は何に効くのか?」「この植物はどう使うのか?」（そこまでの段階で反応がよければ「こうした植物について何か挿話はあるか?」）と訊いてまわり、④その過程での彼らの声やしぐさややり取り、社会的属性を記述してくる、とした¹³。こう

12 現地の代表的な植物図鑑に記載がなかったため、科名の同定に関して九州大学農学研究院森林資源学の玉泉幸一郎研究室にお世話になりました。記して感謝致します。なお属名と種名の同定については現在もお調査継続中である。

13 上述のような問題意識をもっていたので、調査方法としては標本を切り取って持ち歩くよりは、人々にその現場へと来てもらった方が望ましかったのだが、これについては調査期間が短く、ラポール上望ましくないため採用しなかった（こうした筆者の理想を行えた研究者は、管見の及ぶ限りコンクリンただ一人である（Conklin 1954: 12-15)）。また植物自体がこのコミュニティでそう頻繁に見つかるものでもないため、頻繁に採集することは避け、その代わりに水を含ませた新聞紙に挟んで鮮度を落とさないように配慮した。

した調査の結果、33ケースの回答を得たので、以下に結果を示して考察しよう¹⁴。

II-2. 〈社交性〉

(1) 説明で反復される節回し／声

まず、〈植物の人類学〉の調査で重要になる、方名の定量的結果を厳密に見れば、全33ケースのうち、実にこの植物の方名を答えられたのはたったの8ケース（23%）しかなかった。では残りの25ケース（76%）は、この植物を知らないのであろうか。そこが問題なのである。まずこの段階で、「知らない」という回答にさえ、多様な回答が含まれているのを確認して欲しい。

挿話5：2月1日、しばらく空家状態になっていた家に、昨日話を聞いた少年少女が大人を囲んで集まっていたので、宿主に話を聞いた時のこと。家の裏には4人の女性たちと多くの少女達と一緒に居り、宿主は朝食を作っていた。皆に挨拶をした後「どこに行っていたのですか？」と訊く。「ホールズ・クリークね」「今日戻ってきたんですか？」「そう。休暇でね」。そこで簡単に訪問の目的を説明した後「この植物は何ですか？」と訊くと「知らない」。宿主の女性が僕に対して緊張をとかないせいか、昨日筆者の質問に答えてくれた少女達も黙ったままである。

こうなるともちろん、それ以上は訊けなくなる。「知らない」と言っているのだから「それが何に効くのか？」などと訊けるわけがない。一つ一つの実例は割愛するが「知らない」の後に、「フルーツの木には違いないけど」（誤同定）とか、「年寄りなら知ってるよ」（他者示唆）とか、「俺はダービー（ワルムンから西に400km離れた町）から来てるから」（余所者帰因）とかの説明がつくこともある。ここで終わってしまったケースが15ケース（約45%）。こうした声を文字通りに受け取るなら、彼らはこの植物には何らの意味付けをしておらず、この植物から何も引き出せないということになるろう。ところが「知ってる／知らない」の区分で言えば「知ってる」ののだが、その中には次のような例もある。

挿話6：1月30日、コミュニティ長のマックス（♂40）の家を訪ねた時のことである。庭先には2人の女性が立ち話をしており、筆者がマックスに「この植物は何？」と尋ねると、彼はそれをじっと見て、奥さんのイヴォンヌ（♀39）にそれを渡す。イヴォンヌがそれを手にとって嗅ぐと、彼が「ラオインかな？」。すると彼女も「そうね、ラオイン

14 ケースという単位は、彼らの自然な集団を単位としている。本来なら全ケースを掲載したいところであるが、紙面の都合上、事例は典型例に限った。

ね」。

こうした場合、訊かれた当人もなんとなく分かっていたのだが、間違っでは、と考えて近くにいる人間に確認を取ったように見える。こうしたケースの場合、一人一人で質問すると、上述の「知らない」になってしまう危険性が高い。それゆえこうした2ケース（6%）に境を接していた「知らない」の15ケース（45%）をどこまで文字通りに受け取れるかどうかはよく声を聞かないと分からない部分がいつも残るのである。

実際、「方名」は答えられなかった25ケース（76%）の内、その植物が入る別の範疇で「薬草ね」と答えてきたケースが10ケース（30%）にのぼる。そしてこうした回答をした場合、年少者の1ケースの例外を除き、殆どの人間がその植物の「効用」とその薬用「手順」を答えているのである。

挿話7：1月26日、何人かの子供たちが家の前に集まっていたので、行ってみるとケヴィン（♂12）、コーリー（♂9）、レゼルダー（♂5）、メイ（♂4）とレルレノン（♂6）の5人の少年達であった。「この植物は何〜だ」と軽く挑戦するような調子で訊くと、ダービー生まれのケヴィンは「毒だ」と真っ先に言う。続いてコーリーも「毒の木だ」と。そこで、「毒の木ね」とノートを取っていると、コーリーがそれを手にとって「あ、これは薬だ」と言うと、すぐにケヴィンも前言撤回して「薬だ」と言いなおす。……「名前は？知ってる？」と訊くと、「グンピティだ」。「どうやって使うの？」と訊くと「お湯にいれーて、（棒でかき混ぜる動作をしながら）あたりをつきまわーして、で、くろーくなるの（put them in a hot water, and stick around, and change black.）」と、リズミカルに説明してくれる。「何に使うの？」「傷だけだよ。足とか腕の。あんたは座ってるだけで」誰かが薬を塗ってくれる。

以上までのところで、まず方名の想起を基準にしてこだわってしまうと、いかに実態と離れた結果が見えてきてしまうかがわかるであろう。一人一人をバラバラにして方名の想起だけを見れば、33ケース中、8ケース（23%）だけが方名を共有する者として焦点があてられてしまうのだが、こうした回答も含めると、17ケース（52%）がラオインを薬として意味付け、そこから肌のすり傷・切り傷への薬効を引き出し得るのである。

次に、「この植物は何に効くのか？」と薬効への回答を丹念に見ると、そこに微妙な差異があることに気づく。殆どの人間が口をそろえて言ったのが、肌の「すり傷・切り傷」14ケース（42%）、ついで「風邪」6ケース（18%）で、この2つには年齢差も性差もない。だが男女ともに年齢が50歳以上の人間には、回答に微妙な性差が見られる¹⁵。

15 もちろんこうした顕在化した説明を、そのまま潜在的な知識の分散ととしては判断を誤る。むしろ、心理学で言う、想起プライオリティーの問題と解すべきであろう。

挿話8¹⁶：1月17日、懇意にしてくれていたパトリック（♂53）が奥さんと一緒に車で買い物に出かけるところに出遭うと、彼の方から声をかけてきた。「何のプッシュ・タッカーを採ってきたんだ？」「ああ、ラオインと、何だったっけ。コロンゴイ？これってラオインですよねぇ？」「ああ、ラオインだよ。風邪に用いられるんだ。こんな風にしてな（左手の親指をとがらせて口に近づける動作）、ちょっとだけ飲むんだ。」「あ～、風邪ね。」「ちょっとだけ飲むんだぞ。沢山じゃなくてな。……ちよつとな。多く採りすぎるとな、弱まるんだ。ちよつとな。」「もし飲みすぎると？」「お前を弱らせちまうよ。……あと、胃痛にも良いんだ。」「ああ、胃痛にも良いんですかあ。」「ああ、何にだってな。……傷を作っちゃった時にな。引っかけ傷とかさ。そんな時こいつでボギーするんだ。風呂とかな、ボギーとかに使うんだ。」「確認したいんだけど、ボギーって、どんな風にやるの？」「こんな感じ？（杖をつく真似）」「違う、違う。こんな風にやるんだ（バスタブでお湯を浴びるような動作）。」

男性ではこの「胃痛」が唯一、「すり傷・切り傷」「風邪」以外に出てきた答えて、女性には出てこなかった。逆に女性では、この男性の妻であるベティーから次のような薬効が述べられた。

挿話9：1月16日、この薬草を調べるきっかけを作ってくれたベティー（♀56）とその娘ベシー（♀34）に会ったときの話。ベティーが説明してくれる「……向こう側でね、もっと葉を採るのよ。宗教なのね。」「名前は？なんて言う名前なのかな、これ？」「ええと……ラオインね。」「これは薬なの？」「うん。」「どんな種類の病気にこれを使うの？」「ああ、……水疱瘡とかね。……それから、痒みとか、それ以外のどんな病気にもね。」「へええ……それじゃあ、前回僕ら、向こうで遭いましたよね？」「うん、遭ったよ。孫娘という時ね。」「あの時これを集めていたの？」「そうそう。」「何のために？水疱瘡？」「……う～ん、まあそうね。」「でも、どのくらいの量が必要なの？」「ああ……結構ね。こんな感じかしら（片腕で胸に植物を抱える動作）。バケツに入れて煮るのね。」「バケツって、すごくてっかい奴？（ドラム缶サイズのバケツを宙に描いて）」「ううん、普通の。煮てね、身体を丈夫にするの。」「薬だけで丈夫になるの？」「うん……それを煮て……」「じゃあ、僕がこの薬を使いたい時は、まず茹でて？」「うん、茹でて……」「それから？ぜ～んぶ煮るの？」「そうよ、ぜ～んぶ。枝を折って、火を焚いて、煮るのね。」「で、肌に塗るの？」「そう。」「他に何かするの？」「ううん。ぜ～んぶ煮るだけ。」「この薬は水疱瘡だけ？」「なんにでも効くわよ。少し飲んでもいいし。」「……」「何時間ぐらい煮るの？

16 このケースでは、同一人物の説明なので、一部25日のものと混成させている。

一晩中?」「1日くらいかかるかなあ」

50代以上の女性からしか聞かれなかった「薬効」がこの「水疱瘡」と「喘息」「熱」の3つである(各1ケースずつ)。このうち、「風邪」とあえて別に「熱」と答えたケースは不明だが、「喘息、風邪、Abraides (不明) ……」と答えたのは、このコミュニティの呪医であり、彼女が他の人間よりもこうした病名や薬効に詳しいのは分かる。だがそうした特別な社会属性のないベティーが薬効を訊かれてすぐに「水疱瘡」と想起する背景には、女性の方が子供の病気を気にかけるという性向を示唆しているように思われる。というのも、後になって分かったのだが、このとき彼女の孫が実際に水疱瘡になっていたのである。ならば祖父・祖母ともに、この薬効を想起してもよさそうなものであるが、事実として祖父のパトリックは語っておらず、ベティーのみが語ったのである。

またいずれの性にせよ、こうした薬効を語ったのが、50代以上の者達であったのに対して、20歳未満の子供たちが「すり傷・切り傷」しか答えてきていないのも興味深からう。彼らは挿話7に見られたように、「すり傷・切り傷」を作ってこの薬を塗られる立場にあるからこそ、こうした薬効の想起しか聞かれないのであろう。

以上のところまでで、ラオインを「知らない」とする15ケース(45%)と、「ラオイン」と同定できた8ケース(23%)の間に、「すり傷・切り傷」「風邪」等の「薬」であるとする10ケース(30%)が横たわっていることが明らかになる。また、その「薬効」の点でも20歳未満に年齢差が見られ、50代以上には性差が見られることが明らかになったであろう。こうして、ある期間に同じ一つのコミュニティに住んでいる住人であっても、ラオイン1種類の意味付けさえ、それをどう認知して何の薬効を引き出し得るのかは実に多様であることが分かる。

だが筆者が本節で「多様な回答」とともに確認したいのは、こうした方名や説明を包み込む、ラオインを説明する「一様な声」である。

挿話10：2月2日昼過ぎ、まだ伺ったことのない家の前を通ると、以前話をしたことのある少女と成年が、家主らしき女性とカードをしていた。成年との関係は不明だが、少女は彼女の孫であった。カードに一区切りついたようなので、家主ヘレン(♀40)に「この植物は何でしょうか?」と訊くと、少女の方が「ラオイン!」と答え、ヘレンは「薬草ね……」と答える。そこでヘレンの方に「あ、薬草ですか。では、どんな風にこの薬を使うのですか?」と訊くと、彼女は「煮ーてー、水をさまーして、傷をあらーうの……で、風邪用には少し飲むの (Bo-il it, coo-l d-own water, and wa-sh your sore…… and drink little bit for cold sick)」

こうした説明に出てくるメロディー、もしくは、節回しは、先の子供たち（挿話7）が使ったものと殆ど同じであり、多くの大人たちが同様の節回しで説明をしてくるのである。おそらくこの節回しは、発達心理学や人間行動学で言われる母親語（正高 1995）の残響であろう。これは本来、子供たちの可聴閾に声を合わせて彼らの注意を持続させる「声」なのだが（正高 1993）、筆者にラオインの使用法を伝えようとする時、思わずこの残響が引きずり出されてきたのであろう。ラオインという馴染みない植物の多様な意味づけの向こう側には、しかし、こうしてぴったりと我々にも馴染みのある一様な「声」が聞こえるのである。

だとすれば我々はここで、方名のような「知識」がいくら重要だとしても、その知識がこうした優しい「声」に埋め込まれていなかったなら、その伝達ははなはだ危うい、と想像できよう。実際、彼らが狩猟採集に出かける際、こうした声に包まれた親族関係の中で、物事の「知識」やそれへの対処といった「行動」を習得してゆく姿は挿話1、2に見た通りである。だがこれまでは、「異」文化を強調しがちな文化人類学と、身体感覚への関心が希薄な生態人類学により、これまで〈植物の人類学〉で関心が払われたことは無かったのである。しかし、こうした親族縁者達の「声」が〈植物の人類学〉の〈身体感覚〉と〈社交性〉を繋ぐ一つの仕掛けとなっていることを、改めてここで確認しておきたい。

そして更に「こうした植物について何か挿話はあるか？」と質問を続けてゆくと、ラオインの語りが思わぬ社会的関係を反響しているのに気付くことがある。

(2) 境界のあやふやな対象

挿話11：1月30日昼前、数人の女の子達が座っている。彼女達はカレン(♀9)、ヘリカ(♀9)、ライレッカ(♀11)、ケリシャ(♀8)、とマルティナ(♀9)であった。「この植物は何？」と訊くと、一旦カレンだったかヘリカが「薬草」と言うと、皆そう言い出す。彼女達はその方名は知らなかった。それでも、「どんな風に使うの？」と訊けば、やはり例の調子で「水に入れて一、黒くなーったら、ちょーっと塗るの」と説明してくれる。しかしそこで意外な話が始まる。「薬草についての話を知ってる？」ヘリカが筆者に話しかけてきたのである。「昔々、1匹の蛇、毒蛇と1匹の蜥蜴がいました。そしてある日のこと彼らは喧嘩を始めてしまいました。そこで蜥蜴が蛇に噛み付いたところ、その蛇は毒をもっていたので、蜥蜴の方が毒にやられてしまいました。そこで蛇は薬草をつかいました。」「それで彼らが仲直り？」「そう！」

「薬草の起源譚」である。そこでノートを取っていると、実は、彼女等はライレッカがホールズ・クリークから、それ以外の3人は、学校の夏休みでダービーから来ていたこ

とが分かる。本節の冒頭でも述べたように、筆者が滞在していた間、このコミュニティは雨季の最も人口移動の交通が低減する時期であったが、それにも関わらず、オーストラリア先住民の間では、こうした行き来が行われる。だとすれば、ここから道は2つに分かれる。こうした挿話は「このコミュニティの挿話ではない」として外す、という道であり、この選択肢を採用すると、結局は海上に浮かぶ島のような、閉域の〈社会〉というコミュニティ・イメージを再生産することになるだろう。しかし、もう一つの道もある。こうした挿話も「ラオインの挿話」として上述の資料に入れる、という道である。というのも、彼らは現在もコミュニティ間を長距離移動して暮らすという生活を保持しているのであり、むしろこうした生態を本質として一切の記述と議論を構想しなおさなければならぬのである¹⁷。

この道を選ぶなら、この挿話には別の筋道が開かれる。ホールズ・クリークは一部キチャ語が入っているが、ダービーには殆ど入っていない。だとすれば、彼らがキチャ語の「ラオイン」という方名を知らず、だが英語は先住民間を繋ぐ言語として普及しているのであるから、「葉草」範疇を駆使して認知し、「葉草」全体の神話を持つことには積極的な意味が読み込めるのである。我々はこうした〈社交〉的コミュニティというイメージへと記述を転換しなければならず、特に乾季における交叉・交通・交流は、入手できた資料から構築される静態的イメージを、すぐさまひっくり返し得る動態を持っているのである。

以上でラオインという種類の植物を囲繞するコミュニティのマイクロ・マクロな社交性を見渡してきた。前節で述べた彼らの植物への〈身体感覚〉は、ラオイン一つを巡る語りをとってもこうした〈社交性〉に埋め込まれているのである。

しかし、こうして、ラオインの認知が多層的な〈身体感覚〉を持ち、そうした感覚がまた、上述した〈社交性〉の下で、多様な運用をされている、と指摘した途端に、これまでの〈植物の人類学〉では「彼らは身近な環境にあるこうした〈資源〉を多様に〈利用〉しているのである」と記述してしまいがちであった。だが、そうした術語で記述してしまうと、どうも収まりが悪い局面が、「ラオイン」にはあるのである。そこで筆者は最後に、この局面を通じて、人間と環境とのありうる一つの間を探りたいと思う。

17 随分乱暴に聞こえるかもしれないが、300km南下した地域では先住民の季節的移動が報告され(Cane 1987: 394)、300km東の地域でも現在もなお遊動的であるという指摘(Hokari 2000: 6)がある。このことは、当地域では現今との異同の詳細が不明なままだが(cf. Young&Kim 1989: 15-18)、おおよそ当て嵌まるであろう。逆に、例えば「コミュニティ永住者」という基準を設けた場合、1970年代初頭に成立したこのコミュニティには30才以下の人間以外はそうした基準に当て嵌まらなくなる。あるいは「コミュニティに家を持つ」という基準を設けても、移入者が空家を自分の仮住まいにするケースやコミュニティ内に家を持つのに他の家で起居しているケースも観察している。こうした事情で注9に記した廃屋が出てくるのである。こうした状況下で、「コミュニティ・メンバー/非コミュニティ・メンバー」の線引きをしようとすると、その基準は勢い、恣意的になってしまうであろう。

II-3. 〈体験様式〉

(1) ラオイン、ラオイン

本節冒頭で述べたように、現在日常生活の購買行動を見ている限り、人間と環境との関係は彼我に大差は見られないように思われる。そこでは人間を主体として、その環境を客体として動いているように見えるからである。〈資源〉の〈利用〉という記述は、こうした生活を記述する場合には何ら問題はないであろう。ところが、彼らの生活において、少なくとも幾つかの局面で、この〈体験様式〉は、むしろ環境の側へと主体性がシフトしているように見えることがあるのである。

挿話12：2月1日、パトリックの話。ラオインの使い方や挿話について訊いていたところ、彼は筆者に一つの慣用句を教えてくれた。彼によれば、病を乗り越えた後のように、乾いて健康な肌の状態をキチャ語では「ラオイン、ラオイン」と言う、という。

これは一体どのような事態なのであろうか。もし彼らがただ単に、ラオインを〈資源〉として〈利用〉しているだけだとしたら、ラオインの名を、病を乗り越えた後の乾いて健康な肌の状態と結びつけるというこうした感覚は、どこから来るのであろうか。筆者は、人間を主体として、その植物を単なる客体として想定してしまうと、こうした慣用句の収まりがどうも悪くなってしまうように思われるのである。むしろ逆に、ここでは植物を主体として、その人間を客体とする〈体験様式〉を想定した方が、収まりが良いのではなかろうか。筆者はこうした〈体験様式〉に隣接するであろうと思われる話を、この薬草以外の文脈で、2種類聞いた。

(2) 成人儀礼という法

インタビューをとる中、特に筆者に懇意にしてもらっていた方に、「すぐに論文に反映されるかどうかは分からないけれど」という思いを持ちながら、筆者は次のような質問をしたケースがある。

挿話13：1月13日、パトリックの妻ベティーと娘に先日の薬草採集について話を訊いていた後のこと。「どんなことを一番、書いて欲しいのでしょうか？というのも、私が日本に戻った際には、何某かの報告書を書かなくてはいけないんですね。……そこで、僕がそうしたものを書くとき、何があなたにとって一番大切なものなのでしょうか？」「？」「御免なさい。というのね、僕が何某かの論文を書いても、そうした論文が時にはあなた達にとってどうでもいいようなことを書いてしまうことがあるのね。そこで、もし僕に書いて欲しいことがあるなら、何があなたにとって一番大切なんでしょう？」……彼女

とその娘は僕が何を言いたいのかを話し……しばらく頭を大地にうなだれて、じっと考えて、彼女は言った「『法』と『文化』?……」すると娘が説明をして「彼女は『文化』を、と。もしあなたが書くのなら、……法と文化を、って言ってるのよ。」

ここで言う「法」とは、このコミュニティの女性達が彼女達だけで催す成人儀礼のことを指している。こうした「法」という言葉の運用は、男性についても同様であり、「法」が成人儀礼を指して「男に成るということだ」という話も聞いている。そして、この成人儀礼を経た「ロウ・マン（法の者）」という称号は、特に高年者からは誇りをもって語られるのである。すると、この挿話からは、今現在、彼らが自らをこうして在らしめているものとして、自らを超えた存在に主体性を認めている傍証になるまいか¹⁸。こうした話は、対象を異にして、もう1種類ある。

(3) カントリー

挿話14：1月13日、学校でアボリジニ文化教員をしているポリ（♀61）に会った時の話。彼女とは既に何度となく会っているので、その度ごとに前の話で気になっていた質問をしたのだが、その話の流れで「何があなたにとって一番大切なものなのでしょう？」と訊ねたところ、やや間をおいて彼女は言った。「カントリーね、どのカントリーもよ。お金を稼ぐことでしょ、歌を歌うことでしょ、踊ること、それから文化を作ること。動物、植物、風、光、私たちはそう思うわ、あ、それに水。大雨だってそう、小雨だってそう、乾いた大地もそう。コミュニティに関する全て、ね。」

挿話15：1月26日、学校の用務員をしていて、1993年の国際先住民会議に出席したパトリック（♂53）の話である。彼とも何度となく会って話をしていたが、その流れで「何があなたにとって一番大切なものなのでしょう？」と訊くと、彼が12歳の頃は牧場で、報酬もなく、こき使われるばかりだったが、1991年頃から黒人文化を取り戻してきたんだ、と前置きをした後、彼は言った。「大地、樹、水、カンガルー、ハリネズミ、それから七面鳥、エミュー、魚、土地、ブッシュ・プラム、ブッシュ・ポテト、こうした全てだ。ブッシュの大きな樹、お前が理解できる全てだ。」

こうしたコメントから垣間見られるのは、人間と環境の関係において我々とは異なった¹⁹、彼らの〈体験様式〉であろう。もちろん挿話15や16のような社会的属性・人生史を

18 筆者の知る限り、このコミュニティでは最低、①煙儀礼（他者を迎え入れる儀礼）、②成人儀礼（男女毎）、③治病儀礼、④葬送儀礼が行われている。

持っている人間のコメントには、その社会的ステージで習熟してくる言説ということに注意しなくてはならないであろうし、それ以上にこのコミュニティ・メンバーを含むオーストラリア先住民全体が、つい10年前まで経験してきた土地権原剥奪の歴史的背景を考慮に入れなくてはなるまい。

こうした体験様式は、筆者が今回調査してきた限り、①なんらかの文化・社会運動経験者によるコミュニティの語り、②彼らの神話（ドリーミング）及びその実践たる「儀礼という法」の語り、そして③ラオインに関する慣用句であった。おそらく以上の文脈に共通する何かを想定できるとすれば、それは〈生成〉もしくは〈再生〉の契機であり、この〈生（再）成〉の契機をもたらすものとの関係の局面で、彼らは日常生活における人間と環境との主客を反転させて、その主体性をラオインに、儀礼に、カントリーに感知するのではあるまいか。すると、「ラオイン、ラオイン」という慣用句の感覚は、飲む量を間違えれば毒にも薬にもなるラオインの薬効に与った後、彼らのラオインの認知が、一部でドラスティックに転回する、そこから語られる〈体験様式〉なのではなからうか。こうして、向こう側に主体性を認めるその様式が、〈植物の人類学〉において宗教人類学が特に示唆しておきたい点なのである。厳密な検討はさらなる調査で補われなければならないまいが、以上の文脈におく時、「ラオイン、ラオイン」という慣用句は、人間の主体性を超えた、彼らとラオインとの関係のあり方、つまり病の治療関係という文脈においてはラオインの側こそが主体であるという〈体験様式〉の現象として腑に落ちるように思われるのである²⁰。

III. 結論

以上は〈植物の人類学〉内で、認識人類学の「知識」と生態人類学の「行動」の間の位相に執拗にこだわり、それを補うものであった。

筆者の考えを簡潔にまとめよう。〈植物の人類学〉において、筆者は、方名という「知識」はむしろ認知の末端ではないか、として、それ以上に〈身体感覚〉という具体の相を重視した。また筆者は、生態という「行動」をもう一方の末端として、それ以上に

19 文部省の統計数理研究所による国民性調査（1958年—1998年）に依れば、「あなたにとって一番大切と思うものは何ですか。一つだけあげてください」という質問回答で、1973年以前は「生命・健康」、1978年以降は「家族」が1位であり（坂元 2000：10）、体験内容の違いと共に、体験様式の違いが推測できよう。

20 実は、こうした主体性の感知による植物との結びつきは、ラオインだけに限られない。ラオインが「私のドリーミングである」という例は聞いたことがなかったが、一般に個々人の「ドリーミング」においてはこうした感覚がよく聞かれる。しかし、植物の認識体系といわゆる「トーテム」との関連性は、認識人類学が先住民研究に導入された時からの問題系であるので（Hiatt, L.R. (ed.) 1978）、慎重を期して別稿に譲りたい。

〈社交性〉という具体の相を重視した。「知識」あるいは「行動」という末端は、かつてモースの言った「社会的事実のなかで、いわば純粋な音色のみを残そうとして調和音を消去させる一種の実験での自然の試み」(モース 1988:29-30)と似てしまっていたのではなかろうか。そこで我々は、思いきって網羅主義的植物調査を放擲し、「知識」や「実用」という植物との諸々の〈関り〉を繋ぐ〈身体の感覚〉、〈社交性〉、〈体験様式〉を重要な問題として取り上げた。特に最後者では、検討の余地を残しつつも、そうした関係感覚が出てくる局面として、コミュニティの語り、神話とその実践、ラオインの慣用句に共通する、生(再)生の契機を示唆した。これまでの〈植物の人類学〉においては、認識人類学も生態人類学もその網羅的で厳密な方法の故に植物を客体化してしまい、この〈植物の主体性〉という恩恵を指摘することがなかったのである。この「すり傷・切り傷」、この「風邪」、この「胃痛」、あの「喘息」、あの「水疱瘡」を救ったのは、他でもなくラオインそのものなのである、と²¹。

参考文献

- 秋道智爾・市川光雄・大塚柳太郎編 1995『生態人類学を学ぶ』世界思想社。
- 市川 浩 1993『〈身〉の構造』講談社学術文庫
- 小浜逸郎 1998『無意識はどこにあるのか』洋泉社
- ORLOVE, Benjamin S. 1980 "Ecological Anthropology". In *Ann. Rev. Anthropol.*: 235-237.
- 窪田幸子 1994「オーストラリア・アボリジニ女性の労働と経済生活」『大手前女子大学論集』28:155-165
- CANE, Scott 1987 "Australian Aboriginal Subsistence in the Western Desert". In *Human Ecology*, 15(4): 391-434.
- 合田濤編 1982『現代のエスプリ別冊 認識人類学』(現代の文化人類学 第1号)至文堂。
- CONKLIN, Harold C. 1955 *The Relation of Hanunoo Culture to the Plant World*, Yale University.
- Commonwealth of Australia 1990 *Atlas of Australian Resources*, Vol.6 Vegetation, Commonwealth Government Printer, Canberra.
- 坂元慶行 2000「日本人の考えはどう変わったか」『統計数理』48(1):3-32。

21 本考察にあたっては、千葉大学文学部行動科学科教授の武井秀夫氏とのゼミナールから大きな啓発を受けました。また(Hiatt, L.R. ed. 1978, Young&Kim 1989)については、オーストラリア国立大学博士課程の保苺実さんにご紹介いただきました。記して感謝致します。

- 重田眞義 1991「エチオピア南西部におけるエンセーテの品種保存」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』pp.213-231、平凡社。
- 1994「科学者の発見と農民の論理」井上忠・祖田修・福井勝義『文化の地平線』pp.455-474、世界思想社。
- 1995「品種の創出と維持をめぐるヒト—植物関係」福井勝義編『自然と人間の共生—遺伝と文化の共進化—』（講座地球に生きる4）pp.143-164、雄山閣。
- STEWART, Margaret 1999 *Ngalangangpum Jarrakpu Purrurn (Mother and Child): The Women of Warmun, as told to Margaret Stewart*. Magabala Books Aboriginal Corporation.
- SMITH, Pamela A. & Richard M. SMITH 1999 “Diets in Transition: Hunter-Gather to Station Diet and Station Diet to the Self-Select Store Diet”. In *Human Ecology*, 27(1): 115-133.
- 寺島秀明 1995「分類・認識・行動」秋道智・市川光雄・大塚柳太郎編『生態人類学を学ぶ人のために』pp.86-110、世界思想社。
- 成瀬悟策 1988『自己コントロール法』誠信書房。
- BEARD, J.S. 1979 *Vegetation survey of Western Australia Kimberley*. University of Western Australia Press
- HIATT, L.R. ed. 1990 *Australian Aboriginal Concepts*. Australian Institute of Aboriginal Studies.
- HOKARI, Minoru 2000 “History Happening in/between Body and Place: Journey to the Aboriginal Way of Historical Practice”. In *Habitus: A Sense of Place, Proceedings of the Habitus 2000 Conference*. Curtin University of Technology, CD-ROM.
- 正高信男 1993『0歳児がことばを獲得するとき』中公新書。
- 1995『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』講談社現代新書。
- 松井 健 1983『自然認識の人類学』どうぶつ社。
- 1989『琉球のニュー・エスノグラフィー』人文書院。
- 1991『認識人類学論巧』昭和堂。
- モース、マルセル 1988「心理学と社会学の現実的でしかも実践的な関係」『社会学と人類学II』（有地亨・山口俊夫共訳）pp.1-42、弘文堂。
- 柳父 章 1982『翻訳語成立事情』岩波新書。
- 山田孝子 1977「鳩間島における民族植物学的研究」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』pp.241-300、雄山閣。
- YOURG, Elspeth&Kim DOOHAN 1989 *Mobility for Survival: A Process Analysis of*

Aboriginal population Movement in Central Australia. ANU North Australia Research Unit.

LITTLE, Paul E. 1999 “Environments and Environmentalisms in Anthropological Research: Facing a New Millennium”. In *Ann. Rev. Anthropol.*: 235-284.